第三講　複数テキストの問題ファイナルチェック　40分

次の文章は、十七世紀フランスの思想家パスカルが書き残したものを集めた『パンセ』の一節についての解説です。これを読んで後の問いに答えなさい。なお、二字下げてある部分は、『パンセ』からの引用です。

パスカルにとって、人間の自己愛の第一の特性は、欠陥だらけである自己の真実の姿を、自分にも他人にも隠すことであった。その他人が私の欠点を見ぬき、それを指摘してくれる場合、彼は公正であり、その指摘は私の益になるはずだが、私はそのようなふるまいに嫌悪感を抱く。私は彼が正義であるよりは、彼が不正であっても、私を喜ばせてくれることを望むからである。パスカルは、このような私の悪を「(a)自発的錯誤」と呼んでいる。

　　たしかに、欠陥に満ちていることは悪ではあろう。しかし、欠陥に満ちていて、それを認めようとしないのは、なお大きな悪である。なぜなら、それは、そこに自発的な錯誤という悪をさらに加えることに

なるからだ。

私の「自発的錯誤」への欲求は、すぐに叶(かな)えられる。なぜなら、相手もまた私に嫌われるよりは、私に好かれるほうが心地よいからだ。正直に本音を告げて相手を不快にするより、世辞でその場をしのぐほうが心理的な(1)<u>フタン</u>も小さい。

以上のことから、人がわれわれから愛されることになんらかの利点があるような場合、その人は、われわれにとって不快だとわかっている世話を焼くのを避けるようになる。人はこちらが思うとおりに遇してくれるものだ。われわれは真理を憎んでいるので、人はわれわれから真理を隠してくれる。われわれがほめてほしいときには、人はほめてくれるものだ。われわれはだまされるのが好きなので、人はだましてくれるのだ。

また、同じように、私も他者に対して、その真実の姿を暴き立てたりはしない。とりわけ相手が目上の人や権力者である場合には、私は相手の気分を害さないように細心の注意を払う。相手のことを考えれば、ときには

言動を(2)キョウセイしてやることも必要なはずなのに、私は相手をもっぱらほめそやし、うまく取り入って、あわよくば身分や富の保証を得ようとする。こうして、高位者であればあるほど、それだけ多くの人々の阿諛追従（あゆついしょう）を浴び、決しておのれの真実の姿を見つめることはない。

そのようなわけで、幸運によって世間で高い地位に恵まれる者は、その地位が高ければ高いだけ、真理からますます遠ざかることになる。なぜなら人は、相手から好まれることが有利になり、嫌われることが不利になる場合、その相手を傷つけることを恐れるからだ。ある君主がヨーロッパ中の笑いものになっているのに、本人だけが知らないということがあったとしても、私は驚かない。真理を告げると、告げられた相手には益をもたらすが、告げる側は、相手に嫌われてしまうので、損をこうむることになる。そこで、君主のそばで生活する人々は、自分が仕える君主の益よりも自分の益のほうを尊重するので、自分たちが損をしてまで相手に益を与えようなどとは考えないのである。

したがって、私と他者は相互に錯誤を求め、与え合っている。第一に、私は自分をだましてくれる他者のおかげで、自分の欠陥を直視せず、美化

された姿を真実だと思いこむ。第二に、私も同様に、他者の短所には目をつむり、相手に自分が実際以上に優れた存在であると思いこませる。このとき、私も他者も、互いに相手に感謝し、それに報いようとさえするが、実は両者とも、そのようにふるまうのは、(b)相手の益ではなく、自分の益のためにすぎない。

こうして、人間の生涯とは、たえざる幻想にほかならない。人は互いにだましあい、互いにへつらいあっているにすぎないのだ。われわれがいるところで、いないときと同じようにわれわれについて語る者は、誰もいない。人間同士のつながりは、こうした互いの欺瞞（ぎまん）の上にしか成り立たない。もし誰もが、自分のいないところで友人が自分について語る内容を知っていたとしたら、たとえその友人がいかに誠実に、公平に語っていたとしても、ほとんどの友情は持続しないだろう。

人々は互いに相手の偽りの姿を真実と信じこませようと努める。社会生活を成り立たせているのは、このような普遍的な相互欺瞞である。この現象が安定的に機能するかぎりにおいて、社会は平和に維持されるだろう。だが、この共同幻想はきわめてもろいものである。なぜなら、私はAの前

ではAをほめるが、A以外の人物の前では、つい油断してAの欠点について語るからだ。それは即座にAに伝わり、相互欺瞞が(3)ハタンする。

ところで、その私の本音は、単なる悪口ではなく真実を含んでおり、本来ならAが聞き入れればAの益になるはずのものである。だが、Aは私に感謝するどころか、敵意を向ける。真実はこうして、共同体の(4)チツジョにひびを入れる。

つまり、人間は、自分自身に対しても、他人に対しても、偽装、虚偽、偽善にほかならない。だから、人から真実を言われることを望まないのであり、他人に対しても真実を語らない。(c)正義と理性からかくも隔たったこのような傾きはすべて、人間の心に生来根ざしているのである。

人間の邪悪なありようを描くとき、パスカルの筆はひときわ冴えわたる。「(5)スウコウなる人間嫌い」（*ヴォルテール）と呼ばれるゆえんである。

（山上浩嗣『パスカル『パンセ』を楽しむ』による）

＊ヴォルテール――十八世紀フランスの哲学者・文学者。

問一　傍線部(1)~(5)を漢字になおしなさい。

問二　傍線部(a)「自発的錯誤」とは、どのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問三　傍線部(b)「相手の益ではなく、自分の益のためにすぎない」とは、どのようなことをいうのか、本文中で述べられている「益」には二通りの意味があることをふまえながら、わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部(c)「正義と理性からかくも隔たったこのような傾き」とあるが、この「傾き」とはどのようなものか、またそれはなぜ「正義と理性」から隔たっていると見なされるのか、わかりやすく説明しなさい。

問一

(1)	(4)

(2)	(5)

(3)

問二

問三

問四

第三講　解答

問一

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
負担	矯正	破綻	秩序	崇高

問二

公正に欠点を指摘してくれる他人は自分の利益となる存在であるが、自分にも他人にも自分の欠陥を隠そうとする自己愛が人間にはあるので、その指摘には嫌悪感を抱き、自分を喜ばせてくれる不正の方を望むという誤りを犯してしまうこと。

問三

「益」には公正な立場から欠点を指摘してもらい短所を克服するという益と、自分が実際よりも優れたものであると思い込ませてもらったり、身分や富の保証が得られたりという益があるが、高位者が低位者に報酬を与え、低位者が高位者に追従するのは、前者の益ではなく後者の益のためだということ。

問四

「傾き」とは、人間同士のつながりが相互欺瞞により成り立つ幻想の中で生きる人間が生来有する傾向を表し、この互いの偽装や虚偽や偽善は、自分の利益のために相手の真実の姿を見抜いても指摘しようとはしない点で正義に反し、真実を伝えられることは自分の利益になることを理解せず、嫌悪感を抱く点で理性に反するから。